

つくばね vol.27no.1

目次

- 1 大学図書館のはじめといま
- 3 国語科成立10年前の教科書から
- 5 本学教官寄贈著書紹介
- 7 私の一冊
- 9 平成12年度附属図書館統計
- 10 Ask Us としょかんミニガイド
- 12 シリーズ・電子図書館の現状(1)
- 13 掲示板
- 14 編集室だより

大学図書館のはじめといま

山内 芳文

ヨーロッパの大学における図書館の成立は、大学が団体として確立する過程とは無関係ではなかったと思われる。大学が出現するのは、12世紀から13世紀といわれているが、その大学が分野毎に独自の建物をもち、また図書館も附属させる今日のすがたの原型をみせ始めるのは、おおざっぱないいかたになるが、やはり15世紀以降のことだ。教師の同業組合(ギルド)に対するローマ法王や神聖ローマ帝国皇帝の勅許によってその成立が推定される12世紀以降の大学(ユニフェルシタス)は、15世紀には、国家や領邦の君主によって直接設立される大学にほとんどとってかわられ、ユニフェルシタスというもともとギルド以上の意味を

もたない名称のみがかりうじてその起源を偲ばせることとなった。ヨーロッパの古い大学都市、たとえばハイデルベルクの狭い旧市内には、今でも、大学の施設、ことに文科系のゼミナールが散在しているが、大学図書館はその一角に壮大な建物を構えている。これは、明らかに19世紀の後半の建造であるが、それでも、その配置はそれ以前の伝統を明確に変更しているわけではない。ラシュドールの『中世大学史』では、15世紀は各地の大学における図書館の建設の時代であり、衰えたスコラ主義の討論にくたびれた孤独な学生は図書館のなかに独りでより豊かな知的刺激を見出すことができた、といわれている(横尾壮英訳『大学の



起源』1968)。

長いあいだ、つまり大学が出現した12、3世紀から15世紀にかけて、大学には図書館が欠けていた、というのが図書館史の通説だ。ジョンソンの『西洋図書館史』(小野泰博訳『西欧の図書館史』1974)によれば、大学の教師たちは自分たちの文庫をもっていて、その蔵書をお気に入りの学生に貸し与えていたといわれるし、あるいは大学町では書籍商がかなりの書物をもっていて、教師や学生の需要にんでいた、ともいわれている。12世紀のなかばになってはじめて記録に登場するポローニャの場合は、驚くべきことに学生たちの同郷毎の団体(ナチオ)などが図書館まがいのものを保有していたようだ。15世紀に独立した建物をもつようになる大学図書館は、明らかに、このような歴史を引継ぎ、画期的な発展を遂げた。そのおおきなインパクトは、ひとつにはすでに述べたような設置主体の変更、そして忘れてはならないのは、15世紀のなかばの活版印刷術の発明とその急速な普及によって大量の書物が世に出ることになったという事実だ。修道院の図書室の態様を引継いだ初期の大学図書館では、その蔵書の多くが寄付によって成り立っていたことを示している。国家や領邦の君主が設立する大学では、そのかなり早い時期にそれに必要な施設として図書館を附属させている。うえに述べたハイデルベルク、さらにはプラハなどの14世紀に領邦君主によって創設の大学、さらにはそれ以降に創設された同様の大学には、その創立のあとまもなく、ささやかながら大学図書館ができていく。しかしながら、カレッジ・システムが支配的であったパリの場合は、その起源を13世紀なかごろのソルボンヌによる蔵書の寄付に求めることができはするものの、総合図書館の完成をみたのは19世紀になってからのことだ。また15世紀に幾多の曲折を経て設立されたオクスフォードの図書館についても、その起源を14世紀のはじめにひとりの司教が寄贈した文庫に遡ることはできるものの、大学における総合

図書館の重要性についての認識はなかなか育たなかった、といわれている。

国家がその機関として大学を必要としたとき、そこには大学そのものの図書館が当然のように附属していた。最も初期の大学図書館は、おそらく中世の修道院の図書室と同じような規模であったと思われるが、その閉鎖性とは著しい対照をみせていた。さきほど引き合いにだしたジョンソンは、それを「生きて働く図書館」だったと特徴づけている。大学図書館の成立は、修道院の奥深く、図書室に隣接した写本室で写字生として働きながら神学に没頭する修道士たち、その姿はウンベルト・エーコの『薔薇の名前』ですすでにおなじみだが、その修道院を主たる担い手としてきた文化を一挙に開放したのだ。16世紀に設立されたオランダのライデン大学の図書館の様子を示す銅版画が残されているが、前ページに掲げておいたように、その書棚に記されている学問分野は中世以来の自由学芸のテリトリをおおきく越えている。神学の棚のとなりに歴史や文学の棚があったり、哲学の棚のとなりに数学や医学の棚があったりして、さらにはローマ法と教会法の羊皮紙の冊子体文献(コーデックス)が混在する配置は、この大学図書館が、教師たちの限られた専門の文庫を後目に、都市文明の担い手を囑望されている学生たちに教養をひろく提供しようとしていたことを示している。大学図書館こそ、ジョンソンもいうように、近代図書館のさきがけであり、ことばを換えれば、そのような学生たちを通して、新しい時代を先取りする知の発信基地となっていた。

このように、大学図書館の歴史をほんのすこしばかり見渡しただけでも、私たちは、そこに現代の大学図書館が抱えている基本的な課題がすでに芽生えていることを確認することができる。その課題は、明らかに、大学図書館がこれまで果たしてきた積極的な役割を転換させる方向で、みずから際立たせている。15世紀に登場した大学図書館は、現代にいたるまで、教養の求めるその総合

性において、その基本的性格をほぼ維持してきているからだ。本学附属図書館は、いぜんとして残存していた個人文庫の性格を払拭し、そのような総合性を保証した画期的な方式（集中管理と全面開架）を採用しているが、これこそ、15世紀以来の大学図書館が目指してきたものの制度的な到達点なのであった。

しかしながら、その基本的な性格こそが、現在おおきな試練に立たされているように思えてならない。図書館は、なにか急いで調べものをするところであり、それはあらかじめ検索した文献の必要な箇所を複写する場所となってしまうと、ゆっくりと本を探して、ゆったりと本を読むというところではなくなってきている。それどころか、研究のプライオリティの国際競争にさらされている研究者にとっては、研究室から直接アクセスできるオンライン・ジャーナルや文献情報データベースだけが図書館との唯一のかかわりになってきているような状況も生じてきている。また、なにか調べものをするところといったが、それさえもあやしくなっている。閲覧席に堆く書物を

積んで、熱心にノートをとっている学生の姿は、いまではきわめて稀になった。それに、個人文庫に慣れ親しんできた教員の図書館に対する意識が書物の購入意欲の減退というかたちであらわれてきている気配もある。極度の専門主義や業績主義の慌ただしさが図書館の総合性を脅かしているのではないかという認識は、明らかに被害妄想なのだろう。しかしながら、書棚のあいだを逍遙し、気になる本をふと手にするときの愉悦などは、はるか遠い昔の思い出、ひょっとすると自分で勝手に描いてしまっただけの15世紀の大学図書館の幻影なのかもしれない。判断を一步誤れば、図書館どころか、大学そのものの存立にかかわる重大な影響を及ぼすことになりかねないグーテンベルク以来のIT革命と「構造改革」の大状況は、巨大大学の片隅で紙魚（しみ）のような生活をおくってきただけの隠者に、なんの因果か、歴史の重みを越えて、想像を絶した緊張感を強いてくれている。

（やまうち・よしふみ 附属図書館長）



国語科成立10年前の教科書から

甲斐雄一郎

教育研究科国語教育コースで私が隔年に開講している「国語科教育史」は、原資料に基づいた参加者相互の討論を通じて、我が国の国語科教育の目標設定、教材選択、教育実践にかかわる諸問題について歴史的な位相から構造的に理解することを目指している。そしてそれは本学が東京教育大学から引き継いだ、宮木文庫をはじめとする膨大な教科書コレクションの存在があっちはじめて可能となる時間なのである。ここではこの授業の筋道の一部を紹介することによって、国語科教育史を考えるうえで本学所蔵の教科書群が持つ意味の一端を述べたいと思う。

義務教育における国語科は、1900年の「小学校令」においてそれまでの読書・作文・習字科を統合して成立した。この時の国語科の目標は「国語

八普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓発スルヲ以テ要旨トス」と規定されていた。1998年に告示された学習指導要領では国語科を「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」教科として定めている。国語科の目標を、言語による理解力・表現力の養成としてとらえるならば、成立以降今日に至るまで一世紀の間、一貫していたということになる。ただし「要旨」の後半部において「啓発」することが求められている「智徳」のとらえ方によって、国語教育史を連続しているとみるか、断絶しているとみるか、その評価はわかるであろう。